
二つの月に、一つの願いを

双月 亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの月に、一つの願いを

【Nコード】

N1966F

【作者名】

双月 亮

【あらすじ】

世界に選ばれた少年と少女は、望みもしない力を得てしまう。それでも新たな世界で泣いて、笑って、悩みながら、少しずつ積み重ねていく平穏な日々。しかし世界が見る夢は少年達を否応無く混沌とした運命へと誘っていく。ただ一つの真実に向かって……。まったりと進行していく異世界召喚FTです。

序章 世界の見る夢

そうか

赤い光に包まれ、徐々に崩れていく己の体を見ながら、太陽は低下した思考力の中で一つのこと気に気がつく。

二度目だ

いままで幾度となく繰り返してきた先見の力。この世界に来て初めて見た夢。

この事だったのか

幼かった自分には分からなかった。この世界を理解していなかった自分には分からなかった。あの夢が先見だったと。

すまない

目の前の仲間たちは一様に立ち尽くし、自分の最期を見届けている。そのなかで一人、泣き崩れる彼女を見て心が痛む。

すまない

もはや思考することも難しくなってきた意識の中で、唯一つ言葉が
浮かび上がってくる。

たのむ。 もう少しだけ

叶えたい。

最期に、最期に名を呼びたい。

後悔があつた。 憤怒があつた。 懺悔があつた。 悲嘆があつた。

それでも己の半身である少女の名前を。

この世界でただ一つの少女の名前を。

溢れてくる。 止まらない。

この愛情だけをこめて呼びたい。

最期に。 もう一度

「ま
り
か」

第一章 1：世界に捨てられた日 1

「……ま……り……か……」

朝の光が目射す。口から出た呟きは秋の気配のする空気にする
りと溶けていく。

……夢かあ……

奇妙な夢を見た気がする。けどそんな事はかん……け……え
むい。

今朝はやたら眠気が取れない。それに昨日ははしゃぎ過ぎたから
体もだるくて、正直目を開けることも億劫だ。
なのにさつきから感じる朝の光が、起きろっ、起きろお、と攻め
立てるように瞼の上から刺激を与え続けている。

くそお、茉莉花^{まりか}の奴、カーテン開けたなあ……

それでも強烈な睡魔のせいかな閉じた瞼が開かない、それに今日の
布団の感触はやけに気持ち良い。そのせいで余計に布団から出て行
く気が失せてくる。

なんで今日も学校あるんだよあ……

毎朝考える疑問だけど昨日のことであつて、強く思う。

でもなあ起きねえと、茉莉花怖えーし。母ちゃんもつと怖えーし。

唐突に『母ちゃん』という単語で連想したのか何かがフラッシュ

バックする。今は暖かい布団の中にいるのに、なぜか背筋がゾクゾクしてきた。けれど眠気は依然として取れない。ただこのまま起きないと、思い出してしまった母ちゃんの激しい……が恐ろしいので、言うことの聞かない瞼を無理やり意志の力でこじ開け、上半身をムクリと起こす。

……金曜は……国語、算数、体育、理科……音楽……

起き抜けの思考力の働かない頭で今日の時間割を整理してみる。そうやってしばらくぼうつとしていてたけど、徐々に鮮明になってきた視界になにか違和感を覚えた。そう、最初に気になったのは朝の光が射しこむ大きな窓。次に赤を基調とした色鮮やかな絨毯。

んあ？ まあ窓は窓だなあ。それに母ちゃん絨毯敷いたんだあ。判断力の抜け落ちた頭で間違えていることに気付きながらも逃げるように視線を上にはずらす。

んにや？ 天井たつかあ、それにわっかの電気とったんだあ。決定的な違和感を感じながらも何かに縋る様に部屋を見渡してみる。

あれえ？ 部屋ひれえ。畳六枚分だって母ちゃんが言ってたけどこの部屋は段違いだあ。もうわざと驚くことすら諦めたい。そう思いつつも一応やってみた。けど少しむなしい。

言葉にしたいのは無い。誰かに嘘だと言ってもらいたい。目の前の現実から逃げるような思考に反して、唐突に、笑えるほど簡単な疑問が口から漏れる。

「……ここどこだ？」

記憶に間違いが無ければ昨日はちゃんとベットで寝た。昨日は楽しかったし嬉しかったから興奮していたけど夜の十時には寝たと思う。そんな時はこんなフカフカで柔らかいベットじゃなかった。それにこのやたら広い部屋に見覚えな……ん……て……。

グルリと改めて見ると部屋の中は本当に広い。家にある三部屋が全部入っても余りそうだ。それに椅子とか机とかは母ちゃんが喜びそうな家具屋さんで売っている奴みたいで、家にあるリサイクルシヨップで買った奴とは全然違う。と思う。

よくわかんねえ。けど、すげーなあ……。

「ってそれどころじゃねええ！」

だからここどこだよ。あ、あれ？　そ、そうか誘拐かつ。身代金要求かあ？　いや、で、でもまで、までまでえ、かかからだはどうだつ、しばつ、しばられてないっ！？　お、落ち着けオレ。おーけー？　オレ。た、例えばだぞ、オレが誘拐されたとして、こんな風にほつとかれるか！？　オレだったら縛るっ！　そーだ縛るっ！！

……　　だったら誘拐じゃない？

一度沸騰しかけていた頭が、出した答えに少しだけ落ち着きを取り戻す。けどはつきり言ってかなり不安だ。

「そ、それなら、とと、とりあえずだ、母ちゃんと父ちゃんでも探す……かなあ？」

なんでこんな見たことも無い部屋に居るかは分からない。そもそもここがどこなのかさっぱりだ。だけど母ちゃんと父ちゃんを見つさえすれば全部分かる。はず。それにこの部屋には居ないけど、昨日も一緒に部屋で寝てたんだ。なら茉莉花だってどこかにいるはずだ。

そこまで考え、ふと嫌な予感が過ぎる。

こ、ここがもしも悪の組織だったりしたらどうする？

今まで漠然だった不安がハッキリとしたイメージとなり、茉莉花の泣き顔を形作る。その瞬間、背筋がゾクツとした。だけどさつき母ちゃんを思い出したときと違い、心がゾツとするような冷たさを感じ、胸が締め付けられた様に苦しい。

「ぜ、絶対にオレが助けてやるからな。まっ待ってろよ茉莉花っ！
！」

声に出して不安を吹き払い、拳をグツと握り心を奮い立たす。

けっ決意完了だ！。

勇者インサイダー風に心のなかで唱えてみる。

ならまずこの部屋から脱出だつ。それで母ちゃんと父ちゃんよりも茉莉花が先だな。んで、もしもここが悪の組織だったりしたらオレがけちゃんけちゃんにやつつけ

「おはようございます」

「ああ？ はよー」

唐突に右耳から入ってきた挨拶に反射的に返事をする。

言った後から心臓がバクバクいつてるけど、とりあえずちょっと待ってほしい。

「どなたかお探しでしょうか？」

「あっうん、双子の妹なんだけどさ。あいつ今頃悪のそ……し……」

言葉が詰まる。息も詰まる。普通に会話しようって頑張ったけどやっぱ無理だった。

オレはちよつと時間が欲しかったただけなんだ……そう、け、決意とか、覚悟とか？　そういうのが完了する時間が欲しかっただけなんだっ！

今や心臓は最大限まで運動し、ハッキリと体全体でその鼓動を感じる。ドクンツドクンツドクンツと、まるで50M走を終えた直後みたいだ。

さっきから頭の中でずっと右、右だ、右見ろって言ってる。

くそっ、分かってるよ。

ゴクリツとのどを鳴らして唾を飲み込む。

次に緊張して正面に張り付いていた視線をそつと横にずらしてみる。

すると見えたのは体の前で上品に組まれた白い手。

さらに視線を徐々に上に移す。

母ちゃんよりは小さそうな胸。

茉莉花ぐらいのほっそりとした首。

窓から入る光に照らされて、スツと輝く肩で揃えられた金色の髪。

眼鏡の奥、少し冷たそうな、でも綺麗な空の色。

「妹……シャスアーシユース様のことでございますね。お顔が似ていらっしやるのもしや、と思っていきましたが。なるほどお二人は双子でございましたか」

「つてあんただれだああ」

オレの絶叫が空気を震わす。それでも目の前のねーちゃんは身動き一つしなし、オレを見下ろす瞳からは何を考えているのかまったく読み取れない。まるで近所のネコと目が合った時と同じ緊張感が辺りを包む。それでも外せない視線で目の前のねーちゃんを観察しながら、まとまらない頭を何とか振り絞る。

と、とりあえず金と青なんだから、が、外人さんだろつ。それに変な服き……あつ、あーメメイドだ。そーだつ、な、なんだっけ……こ……こす……

……こすぶれだああ！

「こ、こすびゆねねーちゃんつ。オ、オレを、どうすりゆきでいあ」

上手くいかなかったけど、精一杯威嚇するようにねーちゃんに怒鳴りつける。けどねーちゃんに何も変化は無い。というか瞬きすらしているのか分からない。

どうする、どうするんだよ？ やばいやばいやばい……？
てっ手先か、悪だ！ 改造？ へ、へんしんかあ！

「これは失礼いたしました。ご挨拶がまだでしたね。本日より第5代ファシユシユース様付きのメイドをさせて頂くことになりました。エレイテユイラ・アトロポスと申します。エティとお呼びください。」

そう言つて目の前のねーちゃんは頭を下げる。今度は完全に沸騰していた頭がねーちゃんの平たい冷たさを感じる声で急激に落ち着く。

ふあしゅしゅーす？ えれていーら？

何とか聞き取れた言葉もよく分からない。多分聞いたことも無い。な、なんなんだ訳分かねーぞ。なに言つてんだこのねーちゃん？今は大分冷めたけど、沸騰していた時に聞いたから全然理解できなかった。

「ごめんなさい。もう一回……」

なのでそつと人差し指を立ててお願いしてみる。若干腰が引けているのはご愛嬌だ。

「……………」

眼鏡の奥、透き通るような空色の瞳に見つめられる。

怖えーよ。このねーちゃん。なんでジッと見てるだけなんだよー
勇気を出して見続けているが、もうそろそろ限界だ。

なんか言えよー

心の中だけで言ってみる。

「……………」

「これは失礼いたしました。ご挨拶がまだでしたね。本日より第5代ファシユシユース様付きのメイドをさせて頂くことになりました。エレイテユイラ・アトロポスと申します。エティとお呼びください。」

もしかして、このねーちゃん同じことまんま言ったか？ だけど今度は頭下げなかったぞ？

色々気になるけど、言葉自体はちゃんと聞くことはできた。でも相変わらず訳が分からない。

ファシユなんちゃらってオレのこと？ なら、このねーちゃんオレのメイド？

疑問が次々と浮かぶ。

「……えっと、エティねーちゃん？」

あれ？ ちがった？ なんかまたジツと見てるし。

「……はい」

なんだ合ってんじゃない。なんか納得できませんって顔をしてたから間違えてるかと思った。

「そのファシユース？」

「ファシユシユースです」

どっちでも良いじゃん。

「……そう、それってオレのこと？」

「その通りです。貴方様は今代で第52代となりましたファシユシユース様となります。」

再度告げられた言葉の響きになんとなく心が躍る。

おお、なんか勇者っぽくない。オレ。

決意完了だ。勇者インサイダーだっ！

「ご理解いただけましたでしょうか？」

「あ、うん」

決意完了だ。

「それではお仕えさせて頂くにあたって、ご確認させて頂きたい事が有るのですが、よろしいでしょうか？」

か、確認？ 勉強はできるのか？ とかだったらどうする。はっきり言って茉莉花みたいに頭良くないぞ。

で、でも体育ならなんとかなるよな。そうだ春から一応空手始めたし。茉莉花より運動神経いいぞっ。

聞かれる質問にドキドキしながらも、エティなーちゃんを促してみる。

「う、うん。いいよ」

「では、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

にやにい、オレ言ってない!?

まずいよ、自己紹介はされたらするのが基本だって、父ちゃん言っただじゃん。

ヤバイッ、せめて礼儀正しく言わないと、また、また母ちゃんに怒られるっ!

「そ、そっか、ごめんなさいっ」

慌てて頭を下げる。とりあえずこういう時は謝っておけば大丈夫。その後頭を上げ、背筋をグッと伸ばす。

あー、エティねーちゃんの目を見たら、ちよっと緊張してきたっそれでも覚悟を決めて、エティねーちゃんを見つめる自分の瞳に力を入れる。よ、良しっ、言っぞっ。

「……えっと、一見太陽です。三上第三小学校三年二組、昨日で9歳になりました。夢は勇者インサイダーみたいな、正義の味方になることです!!」

朝のピンツと張った空気の中にオレの声が響き渡る。

こうして9歳になって初めての朝は、メイドのエティねーちゃんとの挨拶から始まった。

昨日と同じ今日が来るものと疑いもしなかった幼い俺の、運命の朝。

第一章 1：世界に捨てられた日 1（後書き）

皆々様、読んでくださりありがとうございます。

初執筆、初投稿ということで見るも無残な感じの文章ですが、これから頑張ります。

あと言い訳がましいですが、一応シリアスFTのつもりです。

ただし主人公が現在アレですからしばらくはコメディみたいな感じかも知れません。

そのへんも含めよろしく願います。

双月 亮

2：世界に捨てられた日 2

とりあえず茉莉花は無事に発見できた。というか隣の部屋だった。すぐに茉莉花を発見できたのは、オレの自己紹介がすんだ後、隣の部屋から盛大な泣き声が聞こえてきたからだ。その聞き覚えのある泣き声に急いでエティねーちゃんと駆けつけると、案の定茉莉花とエティねーちゃんに似ているメイドのねーちゃんが一緒に居た。

その後盛大に泣く茉莉花をなんとか宥め、今はメイドのねーちゃん達が用意してくれた朝食を茉莉花と二人で食べている。ちなみに宥めようとしてちよっぴり貰い泣きした事は、勇者の秘密だ。

「あれ？ 茉莉花全然食べてないじゃん。食わねーの？ めっちゃうまいぞ、これ」

オレの正面。朝食も食べず、泣きはらした目を隠すように俯いているのは、明日いけにえになることが決まった村の少女A……じゃなくて妹の二見茉莉花。オレに似た黒目で、オレに似た鼻、オレに似た口。要するに双子。違うのは同じ黒い髪でもオレがボサボサの短髪で、茉莉花は肩の辺りまで綺麗に伸ばしてるってことと、オレが男で茉莉花が女ってことくらいだ。ちなみにオレらは母ちゃん似だ。

「逆に太陽はなんで食べられるのよ？ 知らない人から出されたものなのに……」

俯いたまま不貞腐れた声で茉莉花が呟く。茉莉花は初対面の人が相手だとオレの後ろに隠れるくらい人見知りだ。

「別に知らない人じゃないだろ。さっき自己紹介してくれたじゃん

二人とも。」

そう言つて二人のメイドのねーちゃん達が改めてしてくれた自己紹介を思い出す。まあ、エティねーちゃんのこととは知っていたけど茉莉花の為にね。んでもう一人のメイドのねーちゃんっていうのが

「今日から第44代シャスアーシユースの……まあ要するに茉莉花のメイドになった、エイレーネ・アトロポスだ。レーネで良い。ほどほどによろしく。」

と、割とさばさばした感じのねーちゃん、エティねーちゃん、金髪よりも少し落ち着いた茶色っぽいショートカット。目はキリッとした海の青でちよつとネコっぽかった。んで身長はエティねーちゃんより頭一つ分は高い。父ちゃん位あるかも。胸は母ちゃん位あったかな。要するに父ちゃんと母ちゃんとエティねーちゃんを合体させた感じだ。

まあ、そこまでは良かったんだけど、その後がアレな感じだった

「名前で分かると思うが、エティは私の妹だ。太陽、エティに迷惑かけるなよ。なにかあったらこのレーネ様じきじ、って、おいつ、なにをする。は、放せエ。」

と、紹介の途中でエティねーちゃんがレーネーちゃんをズルズル引き擦り、有無を言わず部屋の外へと連れて行ってしまった。それが約十分くらい前。いまだ二人は戻ってこない。なので準備してあった朝食を冷めない内に食べようって事になったん

だけど、茉莉花は未だ食事の手を付けようとはしない。

「けどここがどこかわからない。何で茉莉花達がここにいるのかもわからない。お母さんやお父さんはどこにいるの？それにレーネさんは茉莉花のメイドって言ってたけどちょっぴりこわいよ……」

さっきと同じ俯いたまま呟いた言葉には、不安とか恐怖とか混乱以外の感情が乗ってる気がする。

うーん…… だとしてもエティネーちゃんよりは友達になりやすそうに思ったけどなあ。

まあ、さっき宥めるときに聞いた話じゃあ、茉莉花曰く初対面の挨拶がどうも駄目だったらしい。

なんでも

「私はエイレーネ・アトロポス。呼ぶときはレーネで良い。今日からお前のメイドだ。それでお前の名は？」

と、なんとも男前な。本人に曰く茉莉花に分かりやすく質問しただけとのことらしいが、確かに朝起きて混乱している最中に、威圧感たつぷりに見下ろされて言われれば俺でも怖い。茉莉花なら泣くね。てか泣いてたか。

ふと茉莉花を見ると俯いた肩プルプルが震えている。やばっ話戻さないと。

「ま、茉莉花の言う通り確かに分かんない事だらけだけどさオレ達

でも、でもさ朝ご飯はきちつと食べなさいって、母ちゃん言った
だろ？ だからとりあえず食べようぜ」

少し焦りながら捲くし立てた言葉に自分でも納得する。

そっだよ『母ちゃん』言ってたしな。それにこう言っておけば大
抵茉莉花は言うことを聞く。まあ、オレもだけど。

第一食べなきゃ元氣もでないじゃん。本当は茉莉花だって腹減っ
てるくせになんで意地張るかなあ。

「お父さんは、知らない人から物を貰っちゃ駄目だって言ってたも
ん……」

茉莉花の反撃は予想外だ。父ちゃんか、どうだったかな……。

ああー？ 確かに言ってたかも……。めんどくさいことすんなよ。
父ちゃん。

「だからエティねーちゃんとレーねーちゃんだ、って言ってただろ」

諭すように言ってみる。実際さっき自己紹介して貰ったんだから
知ってる人だ。

「そんなこと茉莉花だって知ってるけど、知らない人だよ！！！」

さっきまで俯いてボソボソ呟いていた茉莉花が突然顔を上げ、キ
ツと睨みながら怒鳴りつけてくる。なのになんで泣きそうなんだよ、
めんどくせえ……。それに知ってるけど知らない人ってなんだよ。
なぞなぞかよ。訳わかんねー

「なら勝手にしろよ！ ワケワカランチンの茉莉花っ！！！」

ちよつとムカついたけど別に怒鳴るつもりじゃなかった。普段ならしない。でもなんか無性にイライラして。出た言葉が怒鳴り声だったのは、自分でも意外だ。

ガタンツと音を立てて乱暴に椅子から立ち上がり、ベットに走り出す茉莉花。そのままの勢いでベットに飛び込み枕に顔を埋めると、我慢しようとしているのか途切れ途切れに嗚咽が聞こえてきた。たぶん茉莉花も意外だったんだと思う。

うちのベットじゃあんな風にダイブできないなあ……と、茉莉花が泣いてる姿を見ていたくなって、関係ないことを考えてみる。でも駄目だった。すぐに後悔がやってくる。

また父ちゃんに怒られる……。

ズンツと気持ち沈む。父ちゃんは茉莉花贔屓だ。

茉莉花と喧嘩していると途中まで何にも言わなくせに、俺が怒鳴ったりするとすぐに怒る。

「太陽は男なんだから、女の子に怒鳴るな」

「正義の味方は女の子にやさしいだろ？」

「妹がいる太陽には俺の気持ちは分かんっ！」

とか、そんなことを言つて、すぐ茉莉花の味方する。

茉莉花を叩いたりするともつと悪い。

「これは茉莉花の痛みだっ！！」

そう言つて、茉莉花の代わりにグーで仕返しされる。

今回は怒鳴つて泣かしたから、お説教をされて、お尻を泣くまで

叩かれる。

いつもだったら、これ位じゃさすがに泣かないのに。なんで今日は泣くんだよ。ちくしょう……

あ、でも、茉莉花が父ちゃんに内緒にしてくれれば……

茉莉花

> 母ちゃん

> 父ちゃん

> オレ

駄目だ、父ちゃんには言わなくても、母ちゃんには絶対告げ口される。

思い浮かんだ告げ口ルートに絶望感が募る。

やだなあ……

家帰りたくねえ……

もう、父ちゃんに怒られる未来は半ば確信しつつも、とりあえず茉莉花に謝るだけはして置こうと決意完了し、息を吸い込む。

「ま」

「トンッ、トンッ」

唐突にドアをノックする音が部屋に響く。

「は、はいっっ」

び、びっくりした。

タイミングが良すぎてかなり驚きつつも反射的に返事をする。

「太陽様、茉莉花様、アリウス・ヨハン・メンデル司祭をお連れしました。お部屋に入ってもよろしいでしょうか？」

ドアの向こうからエティネーちゃんの声が聞こえる。誰か連れてきたみたいだ。

チラッと茉莉花の様子を伺う。依然茉莉花の嗚咽は続いている。当分泣きやまねえなあ。

ていうか、いつまでも泣いてる茉莉花が悪いんだし。もういいや。

「う、うん。いいよ」

色々考えるのが面倒くさくなって、とりあえず返事をする。

けど、何も知らなかったオレは後悔した。この後泣きながら後悔したんだ。

3：世界に捨てられた日 3

部屋に入ってきたのは三人。エティねーちゃん、レーねーちゃん、それから白と金色のなんかすごい服を着たにーちゃんが入ってきた。なんとなく優しそうな笑顔と茶色のふわふわな髪が、従兄弟の司にーちゃんを思い出させる。

パタンと静かにエティねーちゃんがドアを閉める音が響く。その音と共に部屋の雰囲気が一瞬の柔らかい笑顔みたいな温かいものに変わった気がした。

三人はレーねーちゃんとエティねーちゃんがドアの近くに残り、初めて見るにーちゃんが一人でゆっくりと近づいてくる。でも不思議と警戒心は湧かなかった。

「おはようございます。ファシユシユース様。私はアリウス・ヨハン・メンデル。本日から貴方がたの教師をさせて頂くこととなりました。」

呆けるように見つめるオレの机を挟んだ向かい立ち、にーちゃんが笑顔と共に自己紹介してくれた。

しかし聞き逃してはいけない一言で、ぼうつとしていた頭が復活を果たす。

ありうすよはんめーてる？ うん、そこはまあいいや。

んで教師……………てことは先生かつ。うわっ、勉強かあ、面倒くさあ。

いきなり先生が出てきたことも疑問だが、このにーちゃんがアリウス先生だという事実が重要だ。

「そのことでご説明をさせて頂きたく、参ったのですが、シヤスアーシユース様は……………」

なにかを説明に来たというアリウス先生は、言葉の途中で視線を茉莉花に向ける。

つられる様にベツトで顔を伏せる茉莉花を見やる。うん、まだ泣いてるんだよな―

「茉莉花。アリウス先生来たぞ。いいかげん泣いてないでこっちいよ。」

アリウス先生が少し困った顔をしていたので、とりあえず茉莉花に声を掛けてみる。

「泣いてないもん。怒ってるだけだもんっ!」

と、怒鳴り返してきたが、茉莉花がこっちに来る気配はない。うわあ、当分機嫌直んないかも。

それでも呼び寄せる手段は無いわけじゃない。オレもやられると嫌だから本当は言いたくないけど。

茉莉花の奴しょうがないなあ。

「いーよ、わかったからこっちこいよ。アリウス先生に挨拶しなくちゃ、『母ちゃん』きつと怒るぞ」

「ううー」

『母ちゃん』と聞いて、ビクリツと体を震わせると、ああ、だの、うう、だの渋りながらも茉莉花がベツトから降りてくる。

茉莉花も母ちゃん怖いからな。ちなみに父ちゃんも怖いって言うてたから、家では母ちゃんが最強だ。

ズルズルと音が鳴りそうな様子で歩いてきた茉莉花は、一瞬迷う仕草を見せてからオレの隣に座った。さっき喧嘩したばかりだからなあ。茉莉花の気持ちには分かるが、アリウス先生が正面に立つ以上最初から選択肢は無い。

チラツと隣の様子を伺うと茉莉花は泣き腫らした目の周りが気になるのか、ゴシゴシと擦っている。

茉莉花のことだから泣き顔のままは嫌だろうと思って一応しばらく待ってみる。

けれど様子が一向に変わらないので、構わず自己紹介を開始してみる。

「えっと二見太陽です。三上第三小学校三年二組。昨日で9歳になりました。それでこっちが……」

そう言って茉莉花を視線で促す。けど返ってきたのは非難がましい視線だ。

なんとなく茉莉花が

なんで急に始めるの!?

と、言ってる気がしたのから、こっちも

茉莉花が悪いじゃん。

と、目で訴えてみる。

茉莉花もなんとなく分かったのか、諦めたように言葉を引き継ぐ。

「……二見茉莉花です。三上第三小学校三年一組です。」

朝から泣いたり、怒鳴ったりしたから、茉莉花の声は少しかすれ気味だ。

「太陽、茉莉花が、お名前で、二見が家名ですね？」

アリウス先生が確認するように聞いてきたので、質問の意図は分からないがとりあえず頷いておく。

「それでは茉莉花様も来て頂いたので、改めてご挨拶させていただきますね。私はアリウス・ヨハン・メンデル。本日から貴方がたの教師をさせて頂くこととなりました。本日の用件はお二人にご挨拶と、この国に来て頂いた訳、これからのお二人の立場を説明をさせて頂くため参りました」

『この国？』

茉莉花と疑問の声が重なる。

日本じゃない？

外国？

チラリと横目で隣を見る。茉莉花は今にも泣きそうなほど顔色が悪い。さらに不安が大きくなる。

「はい、この国の名はアナトリア。この国の国教であるアナトリア創造神教から由来した名です。」

アナトリア？

もしかしたら、と思い無言で茉莉花と視線を合わす。

知らない。初めて聞いた。

そう言うように茉莉花は涙目で首を小さく横に振る。

「このアナトリア創造神教では、ラーヌ、ファムリス、シャクリスの三神を創世の神とし、信仰の対象としています。またこの三神は一人ずつ神徒と呼ばれる存在を召喚し、己が御遣いとしています。」

アリウス先生の話は分からない言葉ばかりなので理解できない。けど一つ聞いた事のある言葉が出てくる。召喚。神様が召喚？召喚って、ゲームで出てくるあの『しょうかん』の事なのか？嫌な予感、嫌な空気が広がり続ける中で、アリウス先生の言葉だけが淀む事を知らずに進む。

「すなわちラーヌソレル、ファシュシユース、シャスアーシユース」

ファシュなんとかはオレ、シャスなんとかは茉莉花、二人を呼ぶ時にねーちゃん達が使ってた言葉だ……

「もうお察しのことはと思いますが、太陽様が第52代のファシュシユースとして、茉莉花様が第44代のシャスアーシユースとしてこの世界に召喚されました。」

ドクンツと体全体に心臓の鼓動が響く。

途中から嫌な予感はあつたんだ。

たった一言が心に刺さる。

『……………この世界？』

体から絞り出したような二人の声が、再び重なる。
その声を聞きハツとした表情でアリウス先生の表情が固まる。

「……………そうです。この世界です。ご確認させていただきましたが、お二人はチキユウと言われる世界にいらっしやいましたね？」

キキタクナイ

頷く。

キキタクナイ

これからアリウス先生がなにを言うのか頭では分かってる。

キキタクナイ

「この世界の名はミルアーラ。お二人のいらっしやった世界とは異なる世界になります」

頭の中が白に、ただ真っ白になる。

もう何も考えられな

「お、お家に帰れないの？」

ヤメロ、マリカ

茉莉花が震える声でアリウス先生に問う。

「……はい。お二人には神徒として、この世界で生きていただきま
す」

その答えを聞くまでが限界だった。頭の中の何かがずれる。
オレも茉莉花も溢れて来る涙と嗚咽が止まらない。

その様子を見てこれ以上の説明を断念したのか、アリウス先生は
悲しそうな表情をその顔に滲ませる。

「本日はここまでにしましょう。また明日伺います。……
申し訳ありませんでした」

と、一言残しアリウス先生は部屋から出て行った。

その後のことはあまり覚えてない。

ただ茉莉花と一緒に泣いた。

もう母ちゃんや父ちゃんに会えないのが悲しかった。

もう友達に会えないのが悲しかった。

もう家に帰れないのが悲しかった。

会いたくないなんて思ったことを、父ちゃんに謝りたかった。

家に帰りたくないなんて思ったことを、母ちゃんに謝りたかった。

お互いの存在を確かめるように抱き合って泣いた。

泣きつかれて眠るまで泣いた。

意識が無くなるまで夢であることを願って泣いた。

2008年 10月24日

創世暦2991年 風の月 13日

神に愛され、世界に捨てられた日。

4：神の力、人の力 1

世界は闇だけがあつた

ある時、闇より生まれし三神現る。そこを天とした。

男神ラーヌ、己が体を天より落とす。そこを大地とした。

体を無くした男神ラーヌを嘆き、女神ファムリスは涙を流した。
それは海となった。

体を無くした男神ラーヌを嘆き、女神シャクリスは髪を切った。
それは命となった。

やがて海より生まれし命、新たな男神ラーヌの体となり、天に帰る。それは太陽となった。

それを見届けた女神ファムリス、世界を雲で覆い女神シャクリスと共に月になった。

それを見届けた女神シャクリス、女神ファムリスと共に月になる。
最後の息吹、風となり雲を掃った。

天に輝く三神、世界を遍く照らす創世の光となる。

「結構です。それでは授業を始めましょう」

今日もアリウス先生の授業が始まる。授業の始まりは決まって創世神話の暗唱からだ。

この世界に来てもう四十日近く過ぎた。あの日が風の月13日、今日が光の月11日。ミルアールでは一年が九ヶ月だから、オレらがこの世界に来てそろそろ一ヶ月が過ぎるみたいだ。最初の二週間はオレも茉莉花も出された食事を機械的に食べ、延々と泣き続け、疲れたら夢である事を願って眠る。そんな生活を繰り返していたけど、何度目覚めても変わらない世界に絶望と共にこれが現実なんだと実感した。だけど納得できた訳じゃない。今でも母ちゃんや父ちゃんのことを考えると涙が出てくる。なにせ今も涙が出てきそうだ。僅かに滲んだ涙を右腕でゴシゴシと擦り付ける様に乱暴に拭う。授業中に泣いたりしたらすげえ恥ずかしいし、なによりかつこ悪い別に咎められた訳じゃないけど、妙に恥ずかしさもあって気付かれないか隣に座る茉莉花をそっと窺う。

茉莉花は相変わらず真面目ちゃんだなあ。

背筋を伸ばし前を向きオレらに難しい説明をするアリウス先生の話に熱心に聞く姿はこの世界に来てから初めて知ったことだ。そう茉莉花はいつも授業を真面目に聞いている。今も、というかいつもアリウス先生が教えてくれるのは神学という授業で、この世界の神様の話らしいが、はつきり言ってつまらない。それ以外には文字の読み書きもやっているけど、まだ自分の名前が書けるようになっただけだ。アリウス先生の授業は体育が無いのがすごく寂し

「太陽様、聞いていらつしゃいますか？」

「によあつっ！」

び、びっくりして変な声でた。唐突に声を掛けられたことで心臓がバクバクいつてる。

ま、まずい。アリウス先生、なんかジツと見てるしい。違う意味でバクバクしてる気がする。

普段は夏の木々の葉を思わせる様なアリウス先生の優しい色の瞳が、やけに冷たい無機質な緑に見える。

本能的に感じた恐怖に動かされるまま、視線から逃げるように頭を下げ謝ってみる。

「ごめんなさい。聞いてなかった。……です」

やけに動く心臓の音が気になって仕方ない。下げた頭には射す様な視線を感じるままだ。

こ、怖くて頭上げられないいい

長いようで短い時間が過ぎ、アリウス先生も満足したのか、雰囲気が変わり部屋の空気も柔らかくなる。

「それでは始めからお話するので、今度は聞いていてくださいね」

その言葉でようやく頭を上げ、ブンブンと音が鳴りそうなほどの勢いで首を縦に振る。

「今日は以前より先延ばししていました、アナトリア創造神教内ひいてはこの国でのお二人の立場をご説明しましょう」

今度は聞き逃さない。というか色々大事なものが懸かってる気がする。

「初めてお会いしたときにお伝えしましたが、お二人は神によって召喚された存在です。太陽様はファムリスに、茉莉花様はシャクリスにそれぞれの神に選ばれました」

二人で頷く。

忘れるわけがない。神様が勝手に選んで無理やり連れて来たんだから。

「そして神に選ばれ、この地に召喚された際にお二人はそれぞれ神の力が授けられています」

おお、やっぱりオレ勇者になるのかっつ！

「まず太陽様には先見と呼ばれる力が授けられています。この力は未来を予知する力です。」

未来が分かる力ってこと？　ていうことは

「ハイッ！」

勢い良く元気に手を挙げる。

ただ突然手を挙げたから、茉莉花は驚いたみたいですよ！睨んでくる。

「どうぞ、太陽様」

「それってテストの問題が受ける前から分かったり、明日の晩御飯が分かったりする力って事!？」

「ば、馬鹿あ」

そう言ってなんか茉莉花は恥ずかしそうに俯むく。
良いじゃんか、ちよつとくらいはしゃいだって!

「そうですね。そのような目的で力の使用されたという前例は歴史上ありませんが、能力的に見れば可能だと思います。」

オレすげー

勇者太陽は先見の能力を手に入れた!!
決意完了だぜい!!

「ただし太陽様の力は意識的に使うことが難しく、主に寝ている間に夢として現れることが多いようです。さらに予知する内容が災害、もしくは歴史的な事柄に関することが多い事から、この力は夢見、神託などと呼称されることもあります。これらを理由に太陽様はこの国の守護者という立場にあります」

「ええー」

おもわず口に出る。

だってようするに自分で使えないって事だろー?
なんかガツカリだ。

「はい」

今まで静かに聞いていた茉莉花がスッと手を挙げる。

「どうぞ、茉莉花様」

「太陽の力は難しいって言うてたけど、そう言うって事は逆に茉莉花の力は自分で使い易いって事、ですか？」

「ご明察です。茉莉花様には祝福と呼ばれる力が授けられています。この力は他者に力を分け与える事ができます」

「力を与えるとどうなる、んですか？」

「確認されているのは自己治癒能力の向上、身体能力の向上、中には感情の増幅があつたのではないかと見られる例もあります。この能力は汎用性が高いので、未だ発見されていない使い方が有るのかもしれませんが」

「えっと、それじゃあ茉莉花の立場ってというのは？」

「まず先ほどご説明した通りこの能力は祝福という名で呼ばれ、実際に『与える』ですから神の力として一般にも広く受け入れられている事と、次にシャクリスは美の女神としても有名で、尚且つその神徒は歴史上全て美しい女性であることから、信仰の象徴ひいてはこの国の象徴という立場にあります」

茉莉花の顔がちよつとだけ赤い。
「いっちょまえに照れてるなっ！」

「じゃあ、茉莉花で『美しい女性』っていうのも終わっちゃうな！
！」

キツと茉莉花が睨んでくる。

でもそれだけで言葉ではなにも言ってはこない。

ニヒヒッ！

多分アリス先生がいるから我慢してるんだな。

よし。それならもう一回言っちゃ

「大丈夫ですよ。茉莉花様は必ず美しい女性になられます。私が保証しますよ」

アリス先生がいつもの穏やかな笑顔で断言する。

茉莉花の顔がトマトみたいに顔中真っ赤だ。

やるなあ、アリス先生。

5：神の力、人の力 2

トマトだった茉莉花の顔も少し落ち着いたみたいだ。

でもスーハー、スーハーと鼻息荒くしている茉莉花はちよっぴりアホな子だ。

そんなこと思っていたら、また睨まれた。
声にしないんだから気付くなよ……

「簡単に使えそうな茉莉花は良いよなあ。せっかく魔法使いになれたと思ったのにオレのは自分で使えないんだぜ」

茉莉花の視線を受け流しつつ誤魔化し半分、やつかみ半分の愚痴をこぼす。

正義の味方になる事が第一だけど、魔法は使えた方がかつこいよなあー

「マホーツカイですか？ それは神の力を行使することのできる者、ということでしょうか？」

と、アリウス先生が聞いてくる。アリウス先生は割と知りたがりの聞きたがりだ。

「えっと、魔法っていうのは不思議な力で、何も無いところから火を出したり水を出したりする力、かな？」

ゲームの世界を思い出しつつ説明するも、改めて考えると曖昧なイメージしか湧かない。

とりあえず、ブアアーとかドーンとかそんな感じだよなあ？

「あと変身したり、道具を出したりすることもできるよね」

何かを思い出し、ウキウキと楽しそうに茉莉花が俺の説明に付け足す。でも、茉莉花が言っているのはひらひらの変な服に着替えたリ、弱そうなピンクの杖出したりするだけのやつだ。

あんなのと勇者インサイダーの変身を一緒にするなっ!!

「なるほど、それでしたら在りますよこの世界にも」

「あ、あるのおお!？」

「ほ、本当にいい!!」

あつさりと言ったアリウス先生の言葉に二人で吃驚したけど、茉莉花はそれ以上に嬉しそうだ。

また鼻息荒くなってるし……

アホな子になるからやめとけってそれは。

「ええ、想化、正式には空想具現化能力と言いますが、先ほど言われたことなら幾つかできます。と言いますか、お二人が持つ神の力はこの想化の原点に当たります。」

「た、例えばどんなことができる、んですかっ？」

意気込んで質問をした茉莉花は答えが待ちきれないのか、机から身を乗り出して聞いている。

「この能力で一般に可能だと確認されているのは水、風、火を使った想化です。所詮は人の力なので限度はもちろん有りますが、小さな火を焚く事から突風を起こすことまでと用途は様々です」

アリウス先生の説明の途中から、プシューと空気が抜けしぼんでいくみたいに茉莉花がガツカリしている。ため息からも何かが出ていつている様にみえて、ちょっとだけ可哀相になる。誕生日のプレゼントは魔法のなんとかステッキだったから、きつと変身したかったんだろうなあ……

ちなみにオレは勇者インサイダーのインサイダーブレードだ！！

「しかし本来の想化は全部で九つの力に分かれていると言われています」

「あれ？ でもさっきは三つってアリウス先生が言ったじゃん」

茉莉花も立ち直ったのか、隣でコクコクと頷いてる。

「そうです。人が使える想化が三つ。ですが正確には、神が起こした九つの奇跡、その内三つを人が模倣した力が想化と言われる力です」

なんか難しくなってきたなあ。とりあえず九つある神様の力を三つだけ真似したってことだよなあ？

「お二人の力にも関係のあることですからもう少し詳しく説明しましょう。まず簡易ではありますが創世神話は覚えていらっやいますね。いつもお二人に暗唱していただいているものです。そしてこれに沿って神の奇跡は九つとされ、想化の力も分類されていますが、実は日常的にもこの分類は使われています。お分かりになりますか？」

アリウス先生の質問を考える努力は一応してみる。

うーん、うーん？ うん。わかんねえっ！

でもこういう時は大抵

「……月の名前？」

茉莉花の声は小さくて自信なさげだ。でも茉莉花は合ってると思
った時しか答えないから実は自信満々だ。

「その通り、正解です。」

「一年を九ヶ月に分けた理由もここにあるのですが、闇、天、大地、
海、命、太陽、雲、風、光の九つが、そのまま想化の力の分類とし
ても考えられています」

「その中で闇、天、光は神のみが使える力と言われていますが、大
地、雲、命は神徒つまりお二人も使える力でもあります。太陽様が
雲。茉莉花様が命といった具合です。そして余った三つ海、太陽、
風が我々の使える力に当たります。」

アリウス先生の話を考えてみる。要するにさっき言ってたオレの
力が雲で、茉莉花の力が命って事だろ。んで他にも使える力が有り
ますよってことじゃね？

「じゃ、じゃあさ、オレもその力が使えるのかなあ？」

「もちろんです。太陽様はファムリスの神徒ですので海の想化、茉
莉花様はシャクリスの神徒ですから風の想化が特に使えるようにな
るでしょう」

よっしやあああ！

これでオレも魔法使いだっ！！

「お望みでしたら想化の使い方もお教えしますか？」

『ハイッ！！』

アリウス先生の言葉に茉莉花と声が合わさる。

なんだかんだいって、さっきまで沈んでいたのに茉莉花は嬉しそうに笑ってる。でもオレも顔がにやけてしょうがないからお相子だ。

ヤバイ、今日寝れないかもオレ……

ちなみに神学の時間が減って嬉しかったことは、アリウス先生には絶対に秘密だ。

6：繋がる思い、伝わる思い

10月24日 風の月13日

忘れられない。茉莉花たちの誕生日の次の日。

そしてミルアーラに來た最初の日。

あれから何日が経ったのか分からない。けど、季節は秋から冷たい風が吹く冬へと変わり、この国ではもうすぐ新しい年を迎えようとしている。思い出す。日本で過ごした今年の元旦はいつも通り人ごみを嫌う太陽を、お父さんが無理にあちこちへ連れまわし、結局二人ともくたくたになりながらも、翼伯父さんや従兄弟の司くんが住む月ノ宮神社に辿り着き、先に行って待っていたお母さんと茉莉花に合流。最後は家族揃って初詣をした。

特別じゃない普通の光景が心を締め付ける。

お父さんが太陽に無理やり抱きつき、人ごみの中ではしゃぐ二人の姿が。

その姿を苦笑いしながらも、茉莉花の手を握り優しく見守るお母さんの姿が。

心がズキズキと痛む。思い出すだけでも痛いのにどうしてもそれに縋ってしまう。

いつでも手に届く場所にあつたその光景に、来年も再来年もこの先ずつと触れる事は無い。そう家族が揃って元旦を過ごすこと。ううん。家族が揃うことが無い。

もう、どうしようもないことは頭では分かっているの。

でもやっぱり寂しい。

お家に帰りたい。

お料理のお手伝いをしながら、お母さんとおしゃべりがしたい。
もう嫌がったりしないから、お父さんにギョってしてほしい。

もうこんな世界に居たくない。

アリウス先生が言っていたこの国での役割も茉莉花にとってはどうでもいい。

神様が連れてきたってアリウス先生は言ってた。でもなんで茉莉花なの？

こんなこと茉莉花じゃなくなたって誰だってできるよ。きっと。
それに神様は連れて来れたんだから、帰してくれることだって

「コン、コン、コッコン、コン、コッコン」

どこまでも沈んでいってしまいそうな感情が、唐突に響くおかしなリズムのノックで止められる。

というかまだ続いてる。こんなことするアホな子は一人しか知らない。

「おい、茉莉花、いねーのかぁ？」

ドアの向こうから聞き慣れた声が聞こえる。やっぱり太陽だ。
それに未だ鳴り続いているノックは、太陽の見てたアニメの曲だ。

「ねえ、茉莉花居ないっばいんだけど？」

なんとなく気分が滅入って返事をしないでいると、太陽は茉莉花がいないと思ったみたいだ。

ドアの向こうで太陽は誰かと話してる。たぶんレーネさんかな。

「いや、そんなことは無い筈だが………強行突破するか？」
「い、いるよおっ!!」

一言でレーネさんだと分かるその言葉に危ない空気を感じ、急いで返事をする。

レーネさんは冗談を言わない。言ったことは必ずやる人だ。

「なーんだ。いるじゃん。茉莉花、入るぞー!」

太陽は返事も聞かずに入ってくる。

それじゃあ、結局は強行突破するのと一緒にじゃない？

「はよー、茉莉花。それでさ知ってるか!? さつきエティねーちゃんに聞いたんだけど、なんか明後日に新年祭とかいうお祭りがあるらしいじゃん!!」

部屋に入ってきて挨拶もそこそこに、太陽は一気に捲くし立てる。

「おはよう太陽。こんなに朝早くからどうしたの？」

「だからお祭りだって。お・ま・つ・り。茉莉花寝ぼけてんのか？」

確かに、茉莉花もレーネさんからそういう祭りがあるっていうのは聞いたけど。

「知ってるよ。けど、それがどうしたの？」

「そんなん決まってるじゃん。遊びに行くんだよお祭りに!!」

茉莉花たちは双子だから相手の考えていることが結構分かる。
だけど太陽は何も考えないで会話したり行動するから、偶に分
らない。

今も興奮して話す太陽は、きつと何も考えないで話してる。

たいよお、鼻息荒くして話すとすごいアホな子に見えるよお……

「なんだよ、なんか文句あんのかよっ！」

太陽に考えていたことが伝わったのか、少し言葉を荒くして聞い
てくる。

「……だって、太陽気付いてないの？ 茉莉花たち一度もこのお屋
敷から出してもらってないんだよ」

このお屋敷はお庭も含めてかなり広い。だからお外で遊ぶ事だっ
てできるけど、お庭にあるとっても高い塀の向こうには一度も行っ
た事が無い。

「だから遊びに行くんじゃない。茉莉花はアホな子だなあー」

やっぱり分かってない。アホな子はそっちだよっ！！

だってこのお屋敷は、茉莉花たちが出れないんじゃないかって、茉莉
花たちを出さないようにしてるんだよ。

「……やっぱり無理だよ。そんな簡単にお屋敷から出してくれない
よお……」

どうせ茉莉花たちはこの世界から逃げられない。
このお屋敷すらも逃げられない。

太陽が来るまでであった暗い気持ちが頭をもたげる。

「なにをそんなに心配してるか知らないけどさ、絶対大丈夫だって」

「だってオレと茉莉花とエティねーちゃんにレーねーちゃん、ついでにアリウス先生だっているんだぜ、だから平気だって!!」

うそっ!!

もう三人から良いって言われたの!?

太陽の言葉で沈んでいた気持ちが一気に浮かび上がる。

「あの、レーネさん。その、行っても良い、んですか!？」

ドキドキしながら訊ねる。

しかし聞かれたレーネさんは申し訳なさそうに顔を歪がめている。

「すまない。今、初めて私も聞いたんだが？」

「えっ……………」?

しばらく呆然とする。

一瞬とはいえ期待もした。

本当は茉莉花だって外に出たいと思ってたっ!!

そっ、だからこそ許せない。

太陽に対する怒りが沸々と湧きあがる。

裏切られたと思う気持ちが膨れあがる。

「なんで？　なんで太陽はいつもいつも何にも考えないで行動するの！？」

涙が出てくる。

そうだからって考えれば分かったのに。

太陽はさっきエティさんから聞いたって言うってたのに。

その後たとえエティさんやレーネさんに直ぐ許可を貰えたって、アリウス先生には無理だ！！

だって茉莉花も太陽も今日はまだアリウス先生に会ってない！！！！

一瞬でも期待したのが馬鹿だった。

アリウス先生はもちろん、レーネさんにすら確認しないで勝手に決め付ける太陽が信じられない。

「いきなりなんで怒ってるんだよ？」

まだ太陽は分かってない。

なんで？　なんで？　そのくらい気付いてよ！！

「なんで？　なんで分からないの？　だって茉莉花と太陽はアナトリアの象徴と守護者なんだよ！　それでも、もしかしたらエティさんとレーネさんは良いって言うかもしれない。けど、アリウス先生が簡単に良いって言うわけないよっ！！」

溢れてくる感情が止まらない。

太陽を責める言葉が次々に浮かんでくる。

「茉莉花、それ以上は言わなくて良い。分かっている。分かっているから」

レーネさんはそう言つと茉莉花のことを抱きしめて頭を何度も撫でてくれる。

なんだかお母さんに抱きしめて貰っているみたいですからすごく安心する。けど、そうしたら余計に涙が止まらなくなった。

「なんだよ。そのことかよ。だから三人とも大丈夫だって、最初から言ってるじゃん」

茉莉花たちは双子だ。だから相手のことは結構分かる。

そういう風に茉莉花は思ってたのにつつ！

なんで太陽は根拠も無いくせにそんな勝手なことを言うの！？
こんなに言っても茉莉花の気持ち分からないの？

「太陽。もう良い。それ以上は何も喋るなっ」

もうなにも言えない茉莉花の代わりにレーネさんが太陽に言ってくれた。

その優しさに甘えたくて茉莉花から強く抱きつく。

太陽よりも、よっぽどレーネさんの方が茉莉花のことを分かってくれる……

「なんだよ二人して。オレは何度も大丈夫だって言ってるのに」

太陽のその言葉にプツンって頭の中で何かが鳴った気がした。

レーネさんの腕から抜け出し、爆発しそうな感情を込めて太陽を睨みつける。

「太陽はなんでそんなに自信満々で言い切れるのっ！　いつもみたいにどうせ理由なんて無いんでしょ。それならもう勝手なことは言わないでよっっ！！」

最後は叫ぶように言い放つ。

もう顔も見たくない。

すぐにでもここから出て行ってほしい。

「そこまで言われるとさすがにム力つくけど、夢で見たんだから絶対だろ？　だって神様の力だぜ」

「

.....」

「

.....え？」

時間も体も感情も全部止まった気がした。

初めて見るアナトリアの町は、建物も、道行く人も、何もかもが新鮮に映る。

それに今日は新年祭が行われているので、町全体がキラキラと輝きとても華やかだ。

結局あの後アリウス先生の授業で聞いてみたら

「こちらでもちようどお話ししようかと思っていたのですが、実はお二人が召喚された事実はまだ公表されていません。しかしお二人がこの世界に来てから早二ヶ月。そろそろ今後の対応を国としても、創造神教としても決めなくてはいけません。そこでこの度の新年祭で行われる祭事に参加していただき、そこに参加される陛下並び大司教に秘密裏にですが面通しをして頂きます。」

と、びつくりする展開ですんなり話が進んだ。

そして今は大神殿へと続くこの大通りを五人で進んでいる。
今日は馬車も通れない程の人が溢れかえっているので、全員徒歩だ。

太陽はお屋敷を出てからずっと、アナトリアの町並みの物珍しさの為かキョロキョロと首を動かし、直ぐにでも人ごみの中に飛び込んでしまいそうだった。

なので今は茉莉花と手を繋ぎ歩いている。

太陽はさつきから何度も人にぶつかりそうになるから、見ていてとても危なっかしい……

繋いだ右手が前後左右へと慌しく引つ張られる中、ふと疑問に思ったことを口にする。

「ねえ、そういえば太陽ってどうしてそんなに新年祭に行きたかったの？」

今日は物珍しさもあってなのか大丈夫そうだけど、太陽は人ごみがあまり好きじゃない。

だから余計に不思議に思う。

太陽も町で遊びたかったかのかなあ？

「だって元旦は……『みんな』で初詣に行かないと一年の始まりって感じがしないだろっ！」

繋いだ右手がギュツと握られる。

それ以上太陽は前を向いたまま何も言わない。

だから太陽の左手をギュツと何も言わずに握り返す。

茉莉花たちは双子だからきつと伝わってるね。

何も言わずに歩く。

ありがとう。太陽と一緒に本当に良かった。今年も『家族』と一緒に初詣に行けたね。たいよお……

7：夢では見れない夢を見る 1

去年の終わり、初めて先見の力を使ったあの日。あの先見はオレたちがお祭りに行くことを先見したんじゃないやなくて、王様と大司祭のじいちゃんに会うことについて先見したんじゃないかって、アリウス先生は言ってた。

だけど、オレはお祭りに行くことしか覚えてなかったんだ。

というか、朝起きて見た夢がなんとなく先見だと感じたオレは、エティねーちゃんに新年祭の話を確認し、すぐに茉莉花の部屋に突撃したから、正直『遊びに行く先見を見た』としか分からなかったんだ。

そうだよ、初めてだったんだからしょうがないじゃん。

あつ、ご、ごめんなさい。オレがわるかったよね。

だから、だからもう許してよ、アリウス先生

「ダアアアアアア」

もう駄目だ！ もう無理だ！

出した奇声と一緒に心の中のを吐き出し、逃げ出したい気持ちでグッと堪える。そうして少し落ち着いた心で、手元にある自

分で書いた日記に視線を落とす。そこには時に激しく、時に穏やかに、微妙に震えた線が、ある種の芸術性を持って描かれている。

「なんて書いてあるんだ？」

自分で書いた文字なのに、なんて書いたかワケワカランチンだ。もとより字は上手い方ではないけれど、これはちよつと……

まあ夢の内容なんか毎日まともに覚えてないし、実際に今朝の夢だって全然覚え……て……な……い。くそう

意外と自分に嘘を付くのが難しいことを痛感する。割と覚えている自分が恨めしい。

そうだよつ。覚えてるよ。だって今日の夢は、書き取り練習を延々と繰り返すゆめ……

内容を思い出し血の気が引いていくのが分かる。

だ、だけどあの悪夢は絶対に先見じゃないつ。だって、だって書き取り練習したのは昨日のことだつっ！

もはや夢なのか記憶なのか分からない光景を思い出し、背筋にー筋の汗が流れる。

ま、まずいよ。危機感が否応無く募る。

このままアリウス先生に日記を渡したら、あの夢が先見だろうと記憶だろうと関係なく来る未来は、いつし

「ニヤアアアアア」

もう何度目か分からない奇声を発しつつ、原因となった二週間前

の出来事を思い出す。

年が明けて二週間も経った頃、アリウス先生が一冊の日記帳を持ってきた。

「明日より、起床されましたらこちらに夢で見た内容を記入して頂きます」

そう言ってアリウス先生はオレの前に日記帳を差し出してきた。

「んあ？」

その日のアリウス先生の授業も終わり、晩御飯の内容に思いを馳せていた所だったので少し反応が遅れたけど、生返事をしつつアリウス先生の手から日記帳を受け取る。

「夢で見たこと？」

アリウス先生の言っている意味が理解できず、とりあえず聞き返してみる。

「そうです。先日太陽様が先見を使われた際、時間の経過と共にその記憶が曖昧になられたと仰っていましたが、太陽様の見る夢が先見であるのか否か判断するためにも記録を付ける事になりました」

「毎日？」

「はい。毎日お願いします」

めんどくさー

エティねーちゃんか茉莉花にでも頼もつかなあ。

「なお、見た夢に因りますが、場合によっては国家機密にも関わる
ことになりますので、太陽様御自身で書かれますようお願いします」

まるで心を読んだように、アリウス先生が釘を刺してくる。

うわっ、ほんとに面倒だなあ、どうしようかなあ、夏休みの絵日記
じゃないんだか

「それと問題ないとは思いますが、先ほどお伝えしたとおりこちら
で内容を確認させて頂きますので、アナシウス語でお願いします」

「あ？ うん？」

考え事してた所為で、気の無い返事になりつつも、さりげなく
伝えられた内容を頭の中で咀嚼する。

「……………む、むり無理無理むりムリッツ！！」

「大丈夫ですよ。太陽様でしたらできます。書けるだけの勉強をお
やりになったのですから」

いやいやいや、ちゃんとやってたのは茉莉花だけだよー

とは口が裂けても言えなかった。んにゃ、言わしてもらえなかつ
た。だってアリウス先生の笑顔が眩しい。アリウス先生の笑顔が母
ちゃんの笑顔と重なる。あれは逆らっちゃいけないと、本能が敏感

に空気を読む。

「ハイ……」

あらゆる感情を飲み込み、体から搾り出すように言えたのはたった一言だけだった。

あの後、茉莉花だって「茉莉花も無理だと思う」って言ってた。それでも二週間オレは頑張ったと思う。

弱音はいっぱい吐いた。それでも挫けなかった。奇声もいっぱい出した。それでも挫けなかった。

でも一言、いや、いっぱいアリウス先生には言いたい。

この世界に来てまだ半年すら過ぎてないのに、どうしたら文字が書けるようになるんだよ。いくら神様の力で言葉が通じてるって言ったって、文字は自分で覚えなくちゃいけないんだぜ。そりゃあ、アリウス先生なら何とかなるかもしれないけどオレは二見太陽だよ。無理無理できないって、なのに毎日毎日書き取り書き取りもう腕が痛いって。もう良いじゃん。オレ、アリウス先生が来るまで夢のこと覚えとくからさ、それを口で言うからアリウス先生が書いてよ。そうしたらもう文字のれんし

「トンツ、トンツ」

「いいっ」

ノックの音は静かだったにも関わらず、直前まで考えていたこと

がアレだったので思わず息を呑む。

「太陽様。アリウス司祭がお着きになりました」

ドア越しにエティネーちゃんがアリウス先生の到着を告げる。

もう、もう来たの？ 早いつて。ど、どうすんだよ。授業始まっちゃうじゃん。まだ全然書き終えてないのにつつ。また？ また書き取りすんの？

いいいやああだあああ

声に出して叫ぶつもりだったのに、口が思うように動かなかった。その代わりに聞こえてきたのはカチカチカチというやたら軽い音だけで、それがやけに耳障りに感じる。

「太陽様？」

いつまでも返事の無いオレに疑問を感じたのか、エティネーちゃんが若干訝しんだ声で聞いてくる。

ギリッ

音がなるほど奥歯をかみ締め、荒れ狂う心を無理やり一つの結論へと収束させる。

言ってやる。今日こそ無理だつて言ってやる。

心の奥底に眠っていた勇気を目覚めさせる。

「さあ、ここからが真の戦いだ！！」

ガタンツと音を立て席を起ち、左から右へ右腕を真横に振りぬき、勇者インサイダー風にポーズをキメる。

こうしてオレはアリウス先生と戦うことを決意完了し、エティネーちゃんが待つ扉を開いた。

その手に殆ど書く事のできなかった日記帳を握り締めて。

ただね

この展開がいつも通りだっていうのは、心の奥では分かってたんだ。

8：夢では見れない夢を見る 2

まあ、予想通りだったんだけどね。

茉莉花とアリウス先生が想化の授業をしている横で、一人黙々と今日の日記で必要となる文字の書き取り練習をする。

書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り……

この光景なんか見たことあるなあ。

ふと概視感を覚え、うつすらと涙が滲む眼で文字を連ねる。

書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り……

小さな文字で紙一杯に埋まった『書き取り』の文字に、達成感と敗北感を同時に感じつつもそろりと顔を上げ、小さな声でアリウス先生に書き取り練習が終わった事を伝える。

「アリウス先生。おわりました……」

「そうですか。それでは次に『文字』という字の書き取り練習をこちらの紙にお願いします」

そう言っって新たな紙をアリウス先生は差し出してくる。

受け取るために伸ばした手が、一瞬だけ躊躇する。

いい加減やつてられない、と思う気持ちが脳裏を掠める。

しかしアリウス先生と視線が合い、硬質的な目でジッと見つめられると反発しかけた気持ちも瞬時に萎えた。

あの目はヤバイッ

本能どころか理性でも紙を受け取らない今の状況に危険を感じ、アリウス先生の手から奪うように紙を取る。

再び書き取り作業を開始する。

ひたすら機械的に作業を繰り返す。

文字文字文字文字文字文字……

一抹の不安が過ぎる。

次はきつと『練習』だ……

文字文字文字文字文字文字……

黙々と作業を繰り返すなかで心が徐々に擦り切れていく。

もう文字だ……
むり

授業が始まってからずっと繰り返される単純作業に頭が朦朧とする。

「……アリウスせんせい、おわりま……」

「それでは次に『練習』という字の」

ここまでだった。正直オレは頑張ったと思う。

けど連日繰り返されるこの作業にとうとう我慢の限界を感じる。アリウス先生の目はヤバイッ。そんなことは分かってる。でも、でも……

モウゲンカイダ

今朝方の決意を思い出す。

「アリウス先生っ！！」

「太陽様、なにか？」

普段とは違い、簡潔に問い質してくるアリウス先生に若干萎縮しかけるが、無理やり心を奮い立たせて言葉を言い連ねる。

「この世界に来てまだ半年すら過ぎてないのに、どうしたら文字が書けるようになるんだよ。いくら神様の力で言葉が通じてるって言ったって、文字は自分で覚えなくちゃいけないんだぜ。そりゃあ、アリウス先生なら何、ひいつう」

アリウス先生に文句を言っている間も、意識して視線は決して合わせないようにしていた。母ちゃんの目とイメージの重なるアリウス先生の目に心のずつと奥で恐怖があつたからだ。しかし勢いに任せ、アリウス先生を睨みつけたとたん、自分の過ちに気が付く。

「続きはありますか？」

終わった……

頭の中は敗北感で黒く染まり、アリウス先生の言葉に何も反応できず頂垂れる。

ふと父ちゃんが母ちゃんの前で正座している姿が、記憶の中から次々に浮かび上がる。

いつまでも音の無い、張り詰めた空気が否応無く緊張感を高める。

隣で事の成り行きを見ていた茉莉花も口を硬く閉ざし、アリウス先生の様子を固唾を呑んで伺っている。

「太陽様」

ビクウンツツ

アリウス先生の一言で空気が割れ、体が痙攣したように反応する。

「仰りたい事は分かりました。理解もできます。しかし日記を書く為、早急に太陽様が文字を学ばなくてはならない。この事はどうあっても事実です」

ちくしょう、次はなにを書けば良いんだよ……

自分の未来に絶望を感じつつ、結局は何も変えられなかった状況に悔しさが募る。

「しかし今の学び方では太陽様の負担が大きいくとも理解しました。ですから学び方を変えましょう」

そう言って持ってきた荷物の中から一冊の本を取り出す。

「本日より太陽様にはこの世界の絵本を読んで頂きます」

突拍子の無いことを言い出したアリウス先生に対して思わず声を漏らす。

「え、絵本？」

「はい。絵本です。内容はこの世界の歴史、又は創世神話に沿ったものを選ばせていただきますが、基本的に幼児を対象とした物にな

ります」

差し出された絵本を呆然と眺めながら徐々に頭が沸騰していく。

くっそお、絶対馬鹿にしてるなっ！

アリウス先生が暗に「幼稚園からやり直してきて下さい」と言っている気がして、かなりムカつく。

なんか、なんか言わねえとムカついてしょうが

チョン、チョン

沸騰した頭が爆発寸前だったその時、隣に座る茉莉花がアリウス先生に見えないように足を叩く。

なんだよっつー！！

思わずアリウス先生に対する怒りをそのまま茉莉花に視線でぶつける。

諦めようよお

と、言いたいのか茉莉花は小さく首を振っている。

くそお……

心の奥ではその選択肢しか残ってない事は分かっていた。

最近よく思う。アリウス先生の雰囲気は従兄弟の司にーちゃんに似ているけど、性格は母ちゃんに似てるって。

そう、母ちゃんに似てるんだ。優しいけどすげえマイペースなところだ。

だからどっちも人の話なんか聞きはしないっつ！

結局はそこへ結論としてたどり着き、あきらめて絵本を受け取る。

「それでは本日はここまでにしましょう。また明日伺います」

そう言ってアリウス先生は部屋から出て行った。

後に残ったのは同情するような茉莉花の視線と、文字の書きすぎで右手をプルプルと痙攣させながら項垂れるオレ。

そして、手元に残ったタイトルすら分からない一冊の絵本だった。

9：夢では見れない夢を見る 3

「モグモグとクル」

むかし一匹の竜がいました。名前はモグモグ。

なんでもなんでも食べちゃうモグモグはあっちでモグモグ、こっちでモグモグ。

みんなの食べ物も食べちゃうから、いつもみんなから仲間はずれ。そんなあるとき森の中で果物を食べていると一人の男の子と出会いました。名前はクル。

クルは森の果物を分けてほしいとモグモグに言いました。

モグモグは自分が食べるから駄目だよと言って、森の外へ追い返しました。

次の日またクルが来て果物を分けてほしいと言いました。

モグモグはやっぱり嫌でクルを追い返しました。

次の日またクルが来て果物を分けてほしいと言いました。

モグモグは不思議に思って聞きました。なんでここの果物がほしいの。

そしたらクルは言いました。もうここしか果物は無いんだよ。

なんでも森の外には怖い怖い怪物がいてみんなの果物を全部食べてしまったみたいです。

それに怒ったモグモグはそんな悪い怪物ボクがやっつけてやる。と言ってクルと一緒に怪物を探す旅に出ました。

「そして怪物が自分のことに気付いたモグモグは、みんなの食べ物を勝手に食べないと約束をして仲良く暮らしました」

手に持った絵本の内容を話し終え、パタンツと絵本を閉じた音を最後に部屋が静寂に包まれる。

アリウス先生は正面の椅子に座ったまま目を瞑り、何も言わない。自信は有る。けれどテスト返却の順番待ちをしているような緊張感が、心臓を勝手にバクンツバクンツと動かす。

ゆつくりとアリウス先生が立ち上がる。その雰囲気には危険なものを感じない。と思う。

「良く頑張りました。太陽様。合格です」

柔らかい口調と久しぶりに見た笑顔に安堵の息をつく。

長かった。右腕を擦りながら視界が涙で滲む。達成感と開放感に心を委ねながら、ここまでの十日間を思い出す。

地獄だった……。思わず違う意味で涙が出そうになる。

オレに絵本を渡したあの日、アリウス先生は勉強方法を変えるって確かに言ってた。だから書き取りよりはましだと思ってオレは喜んでいたんだ。次ぎの日現実を知るまでは。そう実際は変えるじゃなく追加する。だったんだ。

正直右腕は限界だ。結局全部で三週間以上毎日欠かさずに書き取り練習をしているオレの右腕は、今現在も常にプルプルと震えている。最近では朝起きたら右腕に話しかけるようになった。今日も一緒に頑張ろうって。

特にここ二、三日はかなり精神的に追い込まれた。茉莉花もさすがに見かねたのか、一昨日からこっそりと日記を書くのを手伝ってくれてる。そして昨日の夜、とうとう少しずつ進めていた絵本の翻

訳が終わった。といっても毎日夜遅くまで、エティネーちゃんがアリウス先生に習ったはずの文法や単語を教えていてくれたことは絶対に、絶対に秘密だつ。

「それでは本日の授業はモグモグとクルに付いて学びましょう」

アリウス先生の言葉でハツと我に返る。と同時に疑問も湧く。隣を見てみると茉莉花も分らないのか首を捻ってる。

「この絵本を渡すときにお伝えしたと思いますが、選ぶ絵本は歴史が創世神話を元にしたものを選びさせていただきます。そしてこの『モグモグとクル』は歴史上存在した人物を基に制作されました」

確かにそう言っていた気もする。まあ疎覚えだけど。

「最初から順を追って説明します。まず、お二人はラーヌソレルと言言葉覚えていらっしゃいますか」

ラーヌソレル。聞き覚えがある。たぶん最初の日だ。できるだけ思い出さないようにしてるけど、そうじゃなくてもあの日の記憶はひどく曖昧だ。それに思い出すと気持ちが否応無く沈む。

「ラーヌの神徒ですか？」

茉莉花の答えにアリウス先生が満足げに頷く。

「そうです。今代の神徒は太陽様と茉莉花様のお二人が存在されていますが、本来ならば神徒は三人、ファシユシユース、シャスアーシユース、ラーヌソレルとなります。しかし1326年以降ラーヌソレルの召喚は確認されず、現在までの約1600年間、神徒は常

に二人となってきました。その理由がモグモグのモデルになった人物ウルーマ・ハマド。第26代ラーヌソレルであり、最後のラーヌの神徒に選ばれた人物にあります」

そこまで言い終えてアリウス先生は一息つく。

一瞬、ちゃんと聞いていますか、というようにこつちを見たのは、気のせいだと思いたい……

「なぜ彼が最後になってしまったのかご説明する前にラーヌソレルの想化をご説明いたしましょう。この想化は名称を竜化と言い、能力は人としての力を大幅に超えた肉体強化です。しかしここで重要なのもう一つ的能力。いえ特徴にあります」

そこでアリウス先生は一呼吸し、緩んでいた空気を締めなおすように間を置く。

オレを見る視線に力が籠り、雰囲気が変わる。

「ラーヌの神徒は死後その肉体が竜に変化するのです」

「死んだあと」

茉莉花が呟くように確認する。

「そうです。そして創世暦1326年ウルーマ・ハマド死去後に起こった竜化に起因して一つの戦争が起こります。後に神滅戦争と言われる物となったこの戦争での犠牲はこの国だけでも主要都市が二つ、地方都市が八つ、人口で言えば当時の三割は超えたのではないかと言われています。実際戦争と言われていますが、事実は一方的な虐殺です」

茉莉花なのかオレなのか分からなかったけど、ゴクリツとのを鳴らす音が聞こえた。

「そして敵となったのは一匹の竜。のちに神喰いの竜と伝えられるウルーマ・ハマドの竜化したものでした」

「この国でも軍を用いて応戦しましたが、ほぼ壊滅状態になったと言われています。そして国として打つ手が無く、滅亡の一途にあったこの事態を大きく動かしたのが、クルのモデルになった人物。当時の第22代ファシユシユースであったクル・ヌギアです」

クル・ヌギア。オレと同じファムリスの神徒……

「クル・ヌギアがどういった手段を用いたのかは不明ですが、結果としてクル・ヌギアは竜化したのです。そして最終的にはウルーマ・ハマドとクル・ヌギアが双方共に消滅し戦争は終結しました。その後ラーヌが神徒を召喚することは現在まで一度も無く、その理由として不明であるクルの竜化がラーヌの降臨で双方消滅したことによりラーヌ自体も消滅したのではないかと仮説が立てられたことから、後に神滅戦争、神喰いの竜と言われる所以となりました」

部屋の空気が冷たい。話の内容もけして明るい物ではなかったけど、原因はそれじゃない。原因はアリウス先生だ。なぜなら話し終えたアリウス先生は未だに強い視線でオレを見つめる。その視線は怒っている時とは違うけど、なにかそら恐ろしいものを感じる。

「太陽様」

アリウス先生に名前を呼ばれる。強い感情の籠められた冷たい真剣な声で。

「この国でファシユシユースが守護者と言われているのはクル・ヌギアがその身を賭してこの国を守った為です。もちろん太陽様がこの世界に来られたのはファムリスが強制的に召喚されたことが原因です。それは理解しています。しかし召喚されこの場にいる以上太陽様が生きる世界はミルアラであり、このアナシウスであることも変えられない事実なのです。自覚をお持ちになってください。この世界で生きる太陽様は第52代ファシユシユースであり、この国の守護者なのです」

掛け布団を頭から被りその中で膝を抱える。いつもならもう寝てる時間なのに今日は眠気が全然来ない。昼間アリウス先生から言われたことが頭から離れないから。

「自覚をお持ちになってください。この世界で生きる太陽様は第52代ファシユシユースでありこの国の守護者なのです」

そればかりが気になって、さつきから頭の中がグルグルしてる。

この国に来て、初めてファシユシユースって言われてカッコいいって思った。なんとなく勇者みたいに思ったから。でもそれは間違いじゃなかった。昔のファシユシユースだったクル・ヌギアはこの

国の本物の守護者だった。それからこの国のファシユシユースは守護者って言われてる。だからオレも。第52代ファシユシユースのオレも守護者。

元々オレの夢は勇者インサイダーみたいに世界を守る正義の味方になることだから、それが無理やり連れて来られたこの世界で少し違うけど叶ったんだと思う。そのことは正直嬉しかった。勇者みた이었다から。けどアリウス先生は自覚を持てて言っていた。たぶんクルみたいになれて。オレは、本当のオレはなにもできないのに。アリウス先生だって分かってるはずなのに……

確かに昔、クルは竜に立ち向かった。この国の守護者だから。だけどクルは死んだ。この国を守るために。

オレも竜が出てきたら戦わなくちゃいけない？ この国の守護者だから？

そんなこと無理だよ……できるはずないじゃん……

死ぬことが分かかっていても戦わなくちゃいけない。クルみたいに、クルみたいに、クルみたいに。

絶対できない……怖い、怖いよお……

それでもそれがこの世界でオレが生きていくための役割。この国のみんなが言うオレの役割。

この世界で竜が生まれる事はもう無い。そうアリウス先生は言っていた。けど。それでも怖い。

なんで？ なんでオレなんだよお。

涙が溢れる。居もしない竜に怯えて体が震えてくる。いないって分かってるのに。

もしかしたらって想像が頭から離れない。離れてくれない。

オレは、オレは無理やり連れて来られただけなのにつ。どうして

……

正義の味方になりたかった。けど、こんなのオレがなりたかった正義の味方じゃないつ。

いやだつ。

もう苦しいんだよお。

だから助けて。

助けてよお。

母ちゃん……

父ちゃん……

寂しくて苦しくて、この世界にいない二人に縋ってしまっつ。わかってるつ。本当はわかってるよつ。けど、けど

「……母ちゃん……父ちゃん……あい……いよう」

夢見た夢は叶ったけれど、叶った夢の重さを知った初めての夜。

誰もいない暗闇に届くはずも無い願いが消えていった。

10：この世界に咲く一輪の花を 1

あれからファシシユースのことをずっと考えてる。

どうすればみんなの守護者になれるかずっと考えてる。

でも答えなんか見つからない。アリウス先生の言ってた自覚って何なんだろう？

やっぱりクルみたいになれってことなのかな。

けど、どうすればクルみたいになれるんだよ。

わかんない。わかんないよ、アリウス先生

「コンッコンッ」

ノックの音で何十回と回っていた思考が止まる。

「太陽様。夕食の準備が整いました。今日もお部屋でお上がりなさいますか」

「あ、……うん」

一瞬返す言葉に迷った。けれど、口から出てきたのはここ数日間と同じ言葉。

その返事をした後で部屋が薄暗いことに気が付く。部屋の明かりは灯されていないし、灯した覚えも無い。窓から入る僅かな月明かりだけが夜の闇に包まれたこの部屋を照らし出している。どうやら考え事をしていたせいで、夕食の時間になったことに気が付かなかったみたいだ。昼過ぎに終わった授業からずっと。

原因はもちろんアリウス先生の自覚を持てと言われた言葉。その

せいで最近は食欲もあんまり無い。それに今まで昼食と夕食は茉莉花と一緒に食べてたけど、ここ一週間はお互いの部屋で食べてる。心配そうな目で見てくる茉莉花となくなく一緒に居辛いから。

「失礼します」

その一言と共に入ってきたエティねーちゃんは、何も言わずに部屋の燭台を順に灯し、そのまま流れるような動きで予め用意していた夕食を机に並べ始めた。

火を灯された燭台の明るさに微かな眩しさを感じ、突然明かりを付けたエティねーちゃんに文句を言いたくなっただけど、結局オレもエティねーちゃんには何も声を掛けず、そのまま用意を淡々とこなすエティねーちゃんの後ろ姿をぼうつとベットの从上から眺めた。

しばらく食器を並べる音だけが部屋に響く。その音を聞きながら、ふと浮かんだ疑問をエティねーちゃんに聞きたくなった。

「ねえ、エティねーちゃん」

オレの言葉にエティねーちゃんは手を休め、体ごとオレのほうを向けてくれる。

「はい。いかがなさいました」

「第51代のファシユシユースってどんな人だった？」

「先代のファス様ですか」

その言葉に疑問を感じ、そのまま口に出して聞いてみる。

「ファスって？」

「失礼しました。市民の間ではファシユシユース様をファス様と省略して呼ばれることがございますので」

ふーん。ならオレは第52代ファスってことか。

「で、そのオレの前のファスってどんなだったの」

「そうですね。第51代ファシユシユースであったオスヴァルト・メンデル様は謹厳実直。公明正大な方だったと聞いています」

きんげーじっちゃん？　こーせーめーだい？

「ごめんもうちょっと簡単に」

「……………」

急に音の無くなった部屋になんとなく居心地の悪い間が広がる。

ぬあ、いつまで経ってもこの沈黙は慣れないなあ

エティねーちゃん考えてるときもジツと見てくるから怖いんだよー

「……………」

「…………真面目で正直者。さらに公平で心の綺麗な方だったと聞いています」

やっと音の戻った部屋に少しほっとしつつ、エティねーちゃんの手言葉でイメージを膨らませてみる。

「へえ。んじや茉莉花みたいな感じかあ」

なんか優しそうな感じだし会ってみたいなあ……

「はい。もう亡くなられて四年になりますが、今でも先代ファシユシユース様を惜しまれる声をたびたび聞きます」

一瞬会ってみたいと思った自分が馬鹿みたいに感じる。この世界でファシユシユースはいつも一人だ。

「各地に赴きご自身の力とは関係なく民衆を救おうとした姿が、皆の心を打たれたでしょう」

何かを思い出すように目を細めて話すエティねーちゃん言葉から、なんとなく優しい気持ちがする。

「そつかあ、オレの前の人も頑張ってたんだ」

「そうです。だからこそ民衆が次のファシユシユース様、未だ公表されてはいませんが太陽様に掛ける期待は大きいのです」

その言葉で気持ちに影が射す。

みんなの期待か……

アリウス先生。オレどうすれば良いんだよ。

また同じ疑問をグルグルと考え始めたオレ見て、会話が終わつたと判断したのか、エティねーちゃんが夕食の準備を再開する。

オレたち二人がいる部屋を食器を置く際の僅かな音だけが支配す

る。

「太陽様。夕食の準備が整いました。どうぞお席へお掛けになってください」

その言葉に従いノロノロと移動し、エティねーちゃんが引いてくれた椅子に座わる。けど夕食を見てもやっぱり食欲は湧いてこない。

「太陽様？」

座つても食事に手を付けないオレを心配してくれているのか、茉莉花みたいな目で見ながらエティねーちゃんがオレの名前を呼ぶ。

「そついやなんでオレたちつてみんなに知らされてないのかな」

「それはメンデル司祭に確認を取らなくては憶測の範囲となりますが、おそらく年齢の問題ではないでしょうか」

唐突過ぎる質問にいつもの調子でエティねーちゃんは答えてくれた。でも誤魔化し切れてない。まだ茉莉花みたいな目でオレを見ている。

「そんな理由なの？」

「憶測ですが」

「そつか。ほかにもつと理由があるかと思つてた」

ただエティねーちゃんの目から逃れたくてした質問だったけど、聞いた答えは意外だ。

「ただし今まで神徒の召喚は五年以上開いた事がございません。ですから少なくとも太陽様は今年度中に公表されると思います」

「茉莉花は？」

「場合によつては同時に公表する可能性もありますが、先代のシャス様が亡くなられて一年も経っていませんのでまだ先になると考えるのが妥当でしょう」

そつか。オレだけでもう少しで……

「太陽様」

「なに？」

エティねーちゃんはあんまり自分から話題を振ってこないけど多分……

「なにかお悩みがあるのではないのでしょうか？」

眼鏡の奥で細められたその目は「あるのではないのでしょうか？」ではなく「あるのでしょうかから話さない」と込められている気がして、小さくだけため息が漏れた。

一瞬の間、その僅かな時間で覚悟を決める。確かに聞かれたくない質問だったけど、本当は聞いて欲しかったその質問に答えることを。

「……うん。守護者ってさ、なにをすればいいのかなあって」

「守護者の在り方。ですか」

「前の人も偉かったんでしょ。だけどオレはなんにもできないしさ」

なんとなく顔が引きつる様な笑顔になる。別に笑いたくないのに。

「……太陽様はファシユシユースとはどういった者だと考えていますか？」

なぜだか少しだけおっかない声で質問するエティネーちゃんに内心怯えつつ、真面目に考えてみる。

「うーん。クルみたいにみんなを守る人で、前の人みたいにみんなの人気者。かなあ」

「それでは太陽様自身は皆をなにから守るのでしょうか」

それは……

「……竜とか？」

最初に思いついたのはやっぱりそれだ。けど

「もはやこのミルアーラに竜は存在しません」

簡単に否定される。確かにアリウス先生も言ってたけどさ。

「それじゃあ、地震とか火事とか台風とか」

「天災ですか。確かに先見を使えば可能なでしょう」

頑張つて考えてみたけどそのぐらいしか思いつかない。けれどエティねーちゃんはオレの答えに不満みたいだ。だってエティねーちゃんの眉間に皺がよつてるし……

「それでは質問を変えます。太陽様は誰を守りたいですか？」

「そんなのみんなだよ。だってオレはファシユシユースだし」

これは簡単だ。だって守護者なら当たり前じゃん。

「見たこともない知らない人をですか？」

「そうだよ。だってそれがオレの役割じゃん」

「それは確かに皆が太陽様に望む事の一つなのでしょう。しかし太陽様は全ての人々をあらゆる天災から守ることはできますか？」

「それは……」

……無理だよ。だってオレはクルみたいにすごい守護者じゃないよ。

視界が涙で霞むのが分かる。エティねーちゃんの意地悪な質問に悔しさが募る。

「太陽様。全ての人々を救うことなど、どんなに優れた歴代のファシユシユース様であろうとも無理なのです。最終的にこの国を救ったクル・ヌギアですらそこまで何千万という犠牲を出したのですから」

その言葉にハツとなる。溢れかけた涙を袖で拭い、ジツと見つめてくるエティねーちゃんの視線を見つめ返す。

「太陽様はこのミルアーラで誰を守りたいのですか？」

さつきと違つて優しい声で聞かれた質問に、この世界での短い日々を思い返す。

「……茉莉花……それにエティねーちゃんにレーねーちゃん。アリウス先生も」

「……ありがとうございます。太陽様」

エティねーちゃんが優しい笑顔と声で、ありがとうございますとオレに告げる。

正直ドキツとした。だってエティねーちゃんが笑うの初めて見た。

「……続きを。それでは茉莉花様をいつたいなにから守るのでしょうか？」

オレがびっくりして見ているのに気が付いたのか、またいつもの顔に戻つて淡々とオレに質問する。

ありゃ、勿体ない。エティねーちゃんは笑つてたほうが美人さんなのに。

「その答えがこの国の皆がファシユシユース様に真に望むものです。太陽様ゆつくりとお考えになつて答えをお出し下さい」

答えないオレが考えているものだと思つたのか、質問の答えを宿題にしてエティねーちゃんが話を終わりにする。

「では太陽様。夕食を温め直しましょう」

そう言ってエティねーちゃんがテキパキと一度出した食事を片付ける。

確かに大分話し込んだから、片付けられていく夕飯はすっかり冷たそうになってる。

エティねーちゃんが片付けをする間、やることも無いからその様子をぼうつと眺めていると一つのこと気が付く。

なんかさっきまで重く沈んでいた気持ちが軽くなったかも。

「キュウウウ」

さっきまで食欲を感じなかったのにお腹の音が空腹を告げる。

「急いで温め直して参りますので、少々お待ち下さい」

そう言っただげた夕食を持って、足早にエティねーちゃんが出て行った。

「キュウウウ」

再度お腹の音がオレに空腹を告げる。

……なんだかオレのお腹も軽くなったみたいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1966f/>

二つの月に、一つの願いを

2010年11月29日07時15分発行